様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０２１９

研究課題名（和文）敵討ち物実録の流布および他ジャンル文芸への影響と、実録の「事実」性に関する研究

研究課題名（英文）Study of prevalence of a revenge thing memoir, study of influence to other genre literature and study about the "fact" of the memoir

研究代表者
菊池　庸介（Kikuchi, Yosuke）

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：３０５１５８３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、敵討ち物実録を複写物等を通じて収集し、内容分析を行うことにより、従来知られていなかった敵討ち物実録の内容を把握することができ、解題（未公開）サンプル数を充実させることができた。また、この作業を通じて、敵討ち物実録には多くの「創作」と認められるものが存在することや、それらの中には、すでに他の実録にもみえる数々の趣向を巧みに利用し、ストーリーを作り上げているものもあることがわかり、実録の作られ方のひとつの方法を見つけることができた。この他、実録が読本や歌舞伎と影響関係がある事例を見出してもいる。

研究成果の概要（英文）：This research clarifies of the revenge thing memoir which was hardly learned about so far clearly through reading's and copy's collecting the revenge thing memoir left in the whole country, and could increase a sample of a bibliography of a revenge thing memoir (unreleased).
At the same time,it revealed that the revenge thing memoir by which much "fiction" was done exists and that there is also something which uses many plots which seem to be appropriated for other memoirs skillfully and completes a story in those already and find one way of how to be made a memoir by content analysis of a collected revenge thing memoir. Additionally, a memoir also searches cases that there are a novel,Kabuki and an influential relation.

研究分野：近世文学

キーワード：実録　敵討ち　近世文学

１．研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景は総じて述べると、次のようである。
・実録研究そのものが歴史が浅く、研究が全体的に遅れていること
・実録全体における敵討ち物実録の割合の高さと未発掘のものが多いこと
・「創作」と認められる敵討ち物実録についての扱い方がいまだ定まっていないこと、などを挙げることができる。
以下、もう少し具体的に説明していくことにする。

近世に主として写本で作られ読み継がれた「実録（実録体小説）」というジャンルの、本格的な研究が行われるようになったのは、昭和 50 年代に入ってからであり、他の近世散文小説類の研究に比べて遅く、未開拓な分野とされている。これまでに『日本古典文学大辞典』（岩波書店）に立項されるような、いわば実録を代表する題材における、諸本の整理、系統作りを中心とした研究、さらに、事件の経緯をあらわした筋立てや、中心的人物の造型の変化をたどる研究がなされてきており、それは現在も続けられている。また、実録は読本、草双紙、講談、歌舞伎、浄瑠璃といった他ジャンル文芸の素材として用いられたことまではわかっているが、具体的に何という実録が他ジャンル作品の素材になっているかはなかなか突き止められず、この方面の研究も、近年は活発に行われてきている。要するに、個別具体的な題材を中心に据えて、その題材そのものの転化成長をたどる研究と、その周辺領域（他ジャンル文芸）との交流を明らかにする研究が主として行われてきたわけである。
しかし、そもそも実録の全貌がいまだに把握できていない。実録は、「どれぐらい残存しているのか」、「どのような事件を題材にした実録が、どのような書名で、どこに存在しているのか」という情報が得にくいためである。これらのことが、実録研究のみならず近世文学研究を推進していくための、大きな障害となっている。
前者については、限られた所蔵機関のものについては、書誌的事項や目録のデータベース化が行われているものの、氷山の一角と言わざるを得ない。
そして後者についてはもっと深刻である。実録の書名は、事件との関連を予想できないような書名を持つものが少なからずある（たとえば『殺報転輪記』が「伊賀越えの敵討ち」を題材にするなど）ためである。さらに、同内容でありながら別の書名を持つ実録も相当数ある。つまり、目当てとする実録の書名に通じていなければ資料検索することも困難であり、このことが解題等の整備が進んだ他ジャンル文芸よりも実録研究が遅れている大きな原因となっている。代表者は、本研究開始以前、『近世実録の研究』（2008 年・汲古書院刊）の中で「実録書名一覧稿」を作成し、主要な実録にみられる、異なった書名を題材別に紹介し、研究の便を図った。
いっぽう、近世に行われた数々の敵討ちは、さまざまな記録類のほか聞き書き、随筆、一枚刷りといった歴史的資料に数多く残されているが、文芸においても、架空の敵討ちを含め、小説・絵本類・芸能など、広く取り入れられている。そしてまた、近世に起きた事件の顛末を物語風に書き綴った写本の実録にも、敵討ちを題材とするもの（敵討ち物実録）は多数認められ、お家騒動など、他の種類の事件を題材にしたものに比して、群を抜いて多い。
代表者は、実録研究を推し進めていく中で、敵討ち物実録が、相当の種類が作られ、それらは内容がほとんど明らかになっていないこと、それらは他ジャンルの素材となったものが多数あると見込まれたこと、さらに、まとまった分量の実録が新たに出現したという情報をしばしば得ることができ、そこには未発掘の敵討ち物実録も少なからず含まれており、それらを公にすることが、実録研究の立場としての急務の課題であると考えた。
また、敵討ち物実録の内容をある程度調査していると、明らかに創作と認めてよいものが多数存在し、それにも関わらず、「事実」として認識・享受されている。この問題については、本研究開始以前に拙稿「「お春の敵討ち」物実録の生成」（『日本文学』59-10）において、実録が写本でしか流布できなかったことが却って事実性を付与することになったと論じたが、他にも要因があったと考えられる。そのひとつとして、敵討ち物実録の筋立ての方法があるのではと思い至り、創作と見なせる敵討ち物実録の、筋立ての分析の必要性を強く感じるようになった。

２．研究の目的

如上の背景を踏まえた研究の目的は、次の通りである。
（１）未発掘の敵討ち物実録の情報を収集、実地に調査することで、「どのような敵討ち事件を扱った実録があり、何という書名で流布していたのか」を明らかにする。最終的にはデータベース化を視野に入れつつ解題を執筆、整備するが、この研究は、実録の情報が圧倒的に不足している現状のもと、実録研究者のみならず、他ジャンル、他分野研究にも有益な情報を提供することが目的である。

（２）調査した敵討ち物実録が、版本小説や演劇作品など、同時代他ジャンル文芸の素材となっている事例を探し出し、両者を比較検討し、双方の関係を解明する。この研究は、他ジャンル文芸研究の側にも資するものであり、また、素材としての実録を指摘することは、広い視点に立てば、従来の近世文学史

に修正を促す可能性も含まれている。また、実録と他ジャンル作品との比較を通じて、それぞれの本質的特徴を見出すことも、目的のひとつとなる。

（３）創作と見なせる敵討ち物実録の、「事実」性を獲得する方法を解明し、当時の人びとの「事実」認識のあり方を探る。ストーリーの組み立て方や行文など、実録のスタイルを分析し、「事実」性の獲得に関係する特徴を見出すことが大きな目的である。また、他ジャンル文芸や同時代の文化・思想にまつわる言説を手がかりとして、架空の事件を扱った実録を「事実」と認識する、当時の民間における「事実」認識のあり方も探っていきたい。換言すれば、実録を文学研究の題材としてだけでなく、当時の民衆の思想的側面を解明する一助として扱うということである。

３．研究の方法

「２.研究の目的」で述べた（１）（２）（３）に分けて、説明・報告する。
（１）未発掘の敵討ち物実録の調査・収集については、まず、調査すべき実録のリスト作成を行う。国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」や、各所蔵機関の蔵書目録等に基づいたり、研究代表者がメモとして作成している実録の所在リストを利用したりしながら、これまで公に知られていない敵討ち物実録と目される書名・請求記号をリストアップして、調査の台帳を作成した。また、後に解題を作成することを考慮して、必要となるデータの項目も作成、入力できるものについては入力していった。
　そのうえで、台帳に基づいて実地調査に赴く。調査先では原本の書誌的事項の調査と、デジタル撮影を行う（国文学研究資料館のマイクロフィルムがあるものについては、原則としてそこから複写する）。
　調査・収集した敵討ち物実録については、熟覧の後、解題原稿を作成していく。解題は、書名・書誌的事項（書誌調査を主目的とするわけではないので、書型・巻冊数・序跋の情報・書写年代・印記・備考など、必要なものに絞る）などのデータをパソコン入力するとともに、内容の梗概を記録し、また、内容上の特徴についても略記していくものである。
　また、実地調査は、これまでの研究活動を通じてすでに実録の所蔵点数が多いことが判明している所蔵先や、点数が多くなくても、未発掘の敵討ち物実録の所蔵情報を得ている所を優先的に行うことにした。

（２）他ジャンル文芸への影響・交流関係の調査については、小説類であれば浮世草子・読本・草双紙を重点的に、それぞれのジャンルの作品を網羅的に通覧している資料や目録類を利用し、演劇関係であれば、同様の資料・目録類の他、作品における登場人物の事典のようなものも参照し、書名や外題・登場人物名・作品の内容解説などから、実録との関係を予想させる作品をピックアップすることを、はじめに行う。
　次に、ピックアップした作品を収集する。信頼できる翻刻資料や原本のマイクロフィルム資料が備わる場合はそれらを収集し、実地調査は必要に応じて実施していくことにした。
　そのうえで、収集した資料を熟覧し、実録と対照させる。実録同様、他ジャンル文芸についても内容の梗概をまとめ（実録との比較で記されるトピックの順序が異なる場合があるので、極力、ストーリーの流れに沿ってまとめていくことにする）、また、登場する人物についてもメモを作り、実録との対照の便を図る。また、それぞれの作品の書写年や成立年、内容上の特徴から、前後関係を考えていく。

（３）創作と見なせる実録の「事実」性獲得方法の解明については、２で記したように、実録の内容上のスタイル分析を行う。（１）等により収集した実録の熟覧や作成した解題原稿の確認を行うことにより、注目すべき事項を抽出していく。行文にも注意しなければならないため、丁寧に本文を読み込んでいく。また、当時の歴史資料や随筆、思想書といった周辺資料に収められている敵討ちについての言説や、実録、他ジャンル文芸等にまつわる記述について、事件や事実認識の問題に関わる事柄を確認していく。

４．研究成果

　本研究の実施期間における研究成果は、以下のようである。これについても、「２.研究の目的」で述べた（１）（２）（３）に分けて、説明・報告する。
（１）については、研究期間中に、画像データとマイクロ複写合わせて約８０点の敵討ち物実録やその周辺資料を収集した。随時内容熟覧と解題執筆を行い、約５０点については解題を作成することができた（現段階では未公開）。この間、国立国会図書館、国立公文書館、国文学研究資料館をはじめ、高鍋市立図書館、島根大学附属図書館、関西大学図書館、弘前市立図書館、北海学園大学北駕文庫等において、所定の実地調査を行い、書誌調査とデジタル撮影を行っている。これらの他、研究期間中に、九州大学附属図書館雅俗文庫、姫路文学館、東京大学教養学部国文漢文学研究室といった公的機関や近隣在住の個人宅など、まとまった実録蔵書の所在情報を新たに得ることができ、実地調査・デジタル撮影を行うことができた。
　なお、弘前市立図書館の実録を調査したところ、『中興義信伝』という、他所では所蔵を聞かない実録が複数所蔵されていること、『芸州義信伝』という同内容異書名のものが

あること、『師恩報讐記』という、上記二書を簡略化した内容を持つものが見つかったことなどから、今後の課題として、地方における実録写本の伝播について考えていくための、有益なヒントを得ることができた。

また、この研究の過程では、実録ではないものの、其鳳著『敵討会稽錦』という浮世草子を公にすることができた。この作品は当時の版元の広告類には書名が載るが現存が確認できなかったものであり、本書の出現により、これまで決着がついていなかった来義庵南峯なる人物と其鳳との関係が、同一人物である可能性を高めることができた。本作品については、島根大学附属図書館堀文庫の調査にてデジタル撮影し、『雅俗』12 号～14 号にて解題と翻刻を掲載した。

（２）については、「七北田（ななきた）の敵討ち」と称される、陸奥国七北田で行われた敵討ちを扱った実録の、他ジャンル文芸との関わりについて調査・考察できたことが、第一の成果として挙げられる。従来、仙台市民図書館所蔵の『敵討七北田』のみが、国文学研究資料館のマイクロフィルムに収められ閲覧できたが、その異本『敵討仙台安永録』が天理図書館に存することがわかり、両者を比較し天理本先行と結論付け、さらにこの実録が速水春暁斎画作の絵本読本『絵本誠忠録』後半部の種本として用いられていること、実録の筋を再構成し、登場する女性を潔癖な性格にすることなどの読本としての特徴を見出すことができた。それだけでなく、この実録が、寛政八年初演の歌舞伎「敵討安栄録」との影響関係があることを発見することができた。これらの成果については、『鯉城往来』15 号に発表している。

また、弘前市立図書館にのみ現存する実録『誠顕常陸帯』を調査した結果、行文の一部が一致していることや登場人物名の一致から、柳園種春作の読本『現過思廼柵』と影響関係があることが判明した。この読本は、従来典拠が指摘されているが、今回、あらたに関係する実録を発見することができた。このことについては、『天空の文学史　雲　雪　風　雨』における代表者担当部分にて触れている。

この他、未発表ではあるが実録『荒川武勇伝』が、二世南杣笑楚満人作の読本『絵本荒川仁勇伝』の典拠であることも確認している。

（３）については、創作物と認められる実録『荒川武勇伝』の筋立てに注目し、本文中にみえる数々の趣向が他の実録にも用いられているものと予想し、『荒川武勇伝』の主な趣向を抽出し、他の実録にみえる例を挙げていくことで裏付けていったことが、成果としてまず挙げられる。このことによって、「事実」を標榜する実録を「創作」するときの、実録作者の方法のひとつを明らかにすることができた。この研究成果については、西日本国語国文学会で口頭発表し、そこにおける質疑等を踏まえ、『文学』16 巻 4 号に論文を発表した。

また、本研究の過程において、「久留米騒動」と呼ばれる、宝暦期の筑後国久留米の百姓一揆を題材とした実録を調査する機会に恵まれ、東京大学総合図書館や久留米市立図書館などに存するこの実録群を悉皆的に調査し、諸本系統を明らかにすることができた。そのうえで『筑後国郡乱実記』を中心にして内容の分析を加え、鎮圧する側、一揆の側それぞれに英雄的人物を設定することで、物語として面白さを創り出しつつ、読者にとっては内容に共感をもたらし、また実録性も備えていることを指摘することができた。この成果については『雅俗』11 号に掲載された。

なお、本研究に付随した成果としては、怪談を扱った実録について、幽霊が登場するときに風が吹く描写が多いという事例を踏まえ、実録『報怨奇談』、読本『雨月物語』「菊花の約」、読本『現過思廼柵』の、幽霊が現れる部分の分析を行い、幽霊が登場する時だけでなく姿を消す時にも風が吹くこと、「陰風」の語について、『雨月物語』での使用例が当時としては珍しいものであることなどを指摘することができた。この成果については、『天空の文学史　雲　雪　風　雨』の代表者担当箇所にて述べている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
①菊池庸介、敵討ち物実録「創作」の一方法―『荒川武勇伝』を例に―、文学、査読有、16 巻 4 号、2015、110-124

②菊池庸介、翻刻『敵討会稽錦』（三）―巻四・巻五、雅俗、査読有、14 号、2015、68-83

③菊池庸介、翻刻『敵討会稽錦』（二）―巻二・巻三、雅俗、査読有、13 号、2014、54-70

④菊池庸介、翻刻『敵討会稽錦』（一）、雅俗、査読有、12 号、2013、96-107

⑤菊池庸介、「久留米騒動物」実録の基礎的研究―『筑後国郡乱実記』系統を中心に―、雅俗、査読有、11 号、2012、45-64

⑥菊池庸介、「七北田敵討ち」物実録の特徴と、その広がり、鯉城往来、査読有、15 号、2012、1-22

〔学会発表〕（計１件）
①菊池庸介、『荒川武勇伝』の方法―敵討ち物実録の作られ方、西日本国語国文学会（招待講演）、2014 年 9 月 14 日、梅光学院大学（山口県・下関市）

〔図書〕（計１件）
①鈴木健一（責任編集）、松田浩、青木太朗、鈴木宏子、栗本賀世子、吉野瑞恵、木下華子、中野貴文、牧野敦司、山本章博、山本令子、鈴木彰、門脇大、永田英理、牧藍子、小財陽平、田代一葉、菊池庸介、津田眞弓、光延真哉、高橋由貴、三弥井書店、天空の文学史　雲雪　風　雨、2015、303-317

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
菊池　庸介（KIKUCHI,Yosuke）
福岡教育大学・教育学部・教授
研究者番号：30515838